特253
649

始

特253
649

G・P・U 著

謎のソ聯
赤い女の内幕

亞細亞出版社版

目次

一　『赤い女』の横顔……（三）
二　女の肩をもつ結婚法……（一一）
三　『結婚・離婚部』拜見……（一八）
四　女大臣コロンタイ……（二七）
五　『ソヴェート型』の女……（三〇）
　地上の女―地下の女―空の女―北極の女、等々

謎のソ聯
赤い女の内幕

G・P・U著

『赤い女』の横顔

男？　それとも女？

「流行は――モスクワから」

もし、こんなことを言つたら、たしかに日本の多くの人々は、狐にでも瞞されてゐるやうに思ふだらう。實際、さういふ人騒がせの流行なんかゞ、あの革命ロシヤに生れるはずがない。だが、少々、「異變」なるものも有るのである。

革命の直後、ソ聯の若い娘たちは、まづ斷髪をした。これは、主に都會のことで、レニングラー

ドの『銀座』――ネヴスキー街などには、かうしたモガさんが腕をがつちり組んで歩いてゐた。新インテリのモボさんといつしよに。そして、今日でも、同じやうな連中が、モスクワの町を風を切つて濶歩してゐる。ところで、私も、彼等のあとを追ふ羽目になつた場合があつた。その時、こんなことを、友人と自分は苦笑しながら話し合つたものだ。

「いつたい、そこを二人で歩いてゐるのは、男かね？　それとも……女？」

「さア、どつちだらう？」

「兩方ともハンチングを冠つてゐるし、男のやうなォーバも着てゐるから判らないね。だが、左の方はちよつと髪が長い？」

「ウム……でも、一番いゝ鑑別法は、まづ先生たちの前へ出てからクルリとうしろを向いて、その顏をよく拜見することだね。ハツ、ハツ、ハ」

斷髪をして、スツカリ元氣になつた娘たちは、男のやうに赤いネクタイをつけ、赤いブラトーチカで頭を卷いた。そして、「全世界の……」何とかといふ仰々しいスローガンを書いた大旗を持つて、街頭を練り歩く。でなければ、壇上に立つて、それこそ懸河の辯を揮つたものだ。中には、わざ〳〵上等のストッキングを棄て、素足に靴を引ッかけて、得々としてゐた者もあるらしい。これ

が本當のプロレタリアの姿ででもあるといつた風に。

『男裝の麗人』と口髭

ところで、この嘗ては颯爽としたプロレタリアの姿が、どうした風の吹きまはしか、いささかブル臭くなつたのである。早い話には、今日のソ聯の若い娘たちは、もう素足に靴を引ッかけたりして、往來に出ることはない。そのすんなりした白い足には、派手なバラ色かなにかの、餘りお安くない絹靴下が穿かれてゐる。無論一時流行した、あの水蜜桃の柔毛のやうな口髭を生やしてゐる、『男裝の麗人』(?)も少くなつたらしい。

口髭といへば、――あべこべで、今までそれを丸ッきり構はなかつた男たちが、却つて氣に病んでゐる。それといふのは、黨の機關紙の『プラーウダ』に、こんな記事が載せられた。つまり、一大臣級の某が、ある會合の席上で、次ぎのやうなスツパ抜きをやつたものである。

「どうして、若い技師たちは、髭をモヂヤ〳〵にし、顏を剃らないのか？　もつと洋服をキチンと着て、口髭でもあつてはどうか？」。だから、この新聞社では、コツケイにも、ついぞ床屋へ行つたこともない薄汚い連中に、大いに理髭的效能を宣傳したものだ。そのためか、この頃は、顏をツ

ルリと剃り立てた男が多くなつたらしい。そして、今までノー・カラーであつた者が急にカラーを付けるやうになり、タキシードや燕尾服なんぞといふものさへ流行し出した。OK！

思はず話が脱線したが――とにかく、その後のソ聯の娘たちは昔の土臭いところが無くなつて、大分お洒落になつてゐる。となると、お好物のカルバサ(腸詰)よりは、ポマードや、香水たんか欲しくなる譯だ。そして、モスクワの目貫きの通りには、ハリウッド子も魂消るやうな『香水屋』が出來た。その新聞廣告に曰く――「藝術的に陳列し、模範的な香水を賣る店が、ゴーリキー街に開かれました。また、スーハレフスカヤ廣場にも支店が設けられてをります。本店も、支店も、最優秀品を取りそろへて、お客さまのお來光を待ち受けてゐる次第で御座居ます」

描き眉と付けホクロ

そればかりか、最近には……と言つても、驚いてはいけない。若い女性の眉の工作も始められてゐる。つまり、今日までソ聯の婦人たちには、眉を剃つたり何かすることは、一途に『ブルジョアの遊戯』であると考へられてゐた。でも、後には、これをスッカリ剃り込んで、三日月のやうに細い描き眉をし、付けホクロをするまでになつた。かと思ふと、睫毛をカールしてゐる者もポツ〳〵

見受けられる。そしてクレムリンの古い塔が宵闇の中で繪のやうに霞む時、かれらは妖怪のごとく街頭に浮び出すとか。だが、さうした流行を追ふ女は、まだ世間から爪はじきされると見えて、こんな朗かなエピソートが殘つてゐる。

ある日、モスクワのスポーツ競技場――『ダイナモ』へ、五、六人の若い女工が樂しさうに出かけたと思ひたまへ。やがて、皆んなの者は席に就いたが、この内の一人がにはかに顔をしかめると申し合はせたやうに、他の者も不機嫌さうな表情をした。といふのは、かれらの直ぐ傍に、「我こそは巴里ッ子だ……」といはぬばつかりに眉をスッカリ剃りおとし、細い描き眉をしてゐる同僚の女がゐたからだ。すると、まるで頭の上にフオア・ボールでもかつ飛ばされたやうに跳ね上がつてかうロ々に罵つたのだつた。

「妾たちは、どうしても、お前さんなんかとは一緒に坐らないよ。ブールジュイ――め！」

だが、現在、モスクワには、幾軒かの美容所も出來てゐる。そして、銀狐のショールを卷いてゐる女などが盛んに出入りしてゐるさうだから、かうした流行は容易にすたれまい。であるとするとその門、爪に戀人の名を書いたり、膝に彼氏のスケッチを描かせて樂しむといつたやうな、おハネさんも現はれるかも知れない。

ところで、ここに聞き捨てならぬのは、この流行が、若い男まで蝕んでゐるといふことだ。たとへば、工場へセッセと通ふ者や、集團農場で黒くなつて働く筈の者が、どういふ氣紛れか、眉を剃つたり描いたりしてゐると傳へてゐる。とすると、いづれは、若い男女同士が集つてジャズを歌ふかと思ふと、赤い戀を囁く段取りになるといふのだらう。だが、このことは、チト『眉唾もの』であるかも判らない。

男も眉の工作？

兎に角、ソ聯では、大の男までが眉の工作もするといはれる位だから、いきほひ、婦人の服裝も『超特急的に』奇拔にならずにはゐない。といつても、まだ、その裁ち方や何かにはモダン味が少いやうだが、柄にはかなりに凝つたものがあるらしい。

たとへば、例の『五ヶ年計畫』が始まつたころには、曠野をまつしぐらに走るトラクターや、空を高く飛ぶ飛行機なんどが美しく染め出された。でも、その後は國際聯盟に興味がもたれて、戰爭モノが流行になつてゐるさうだ。反ムッソリーニ模樣だの、支那擁護模樣だのといふものもないと限らない。

但し、こんな模樣は——どつちかといふと、いさゝかブロ的かナ？

『幸福の鍵』を得る女

ソヴェート婦人の奇拔な服裝やお化粧について書くと、次ぎのユーモラスな挿話もあることを忘れられない。

何んでも、ツウヨールといふ町では、普通の娘——其の中には政治に走つてゐる者も含んでゐるが——がどんノ〳〵結婚に成功するさうだ。だが、同じ政治に走つた者でも、俗にいふアクチウイストカ(精勤者)には一向に富籤が當らないとか。といふのは、さうした婦人たちが自分の相手にする男の性質とか、才能とか、立場とかを頻りに詮議立てするからではない。それなら——話はあまりに月並みなのだ。

手ッ取り早くいふと、この婦人たちは、第一にお化粧が上手でない。お白粉のつけ方を例に上げるなら、ちつともそれが伸びてゐないか、コッテリの厚化粧かだ。まして、一九三八年式パーマネント・ウエーブのことなんかは、殆んど御存知ない。それから、碌な着物は持ち合はせないだらう。ところで、普通の娘たちは、氣のきいた衣裳を箪笥の中へドッサリ仕舞ひ込んでゐるし、お化

粧は朝飯前だ。だから、どうしても幸福の鍵は、これらの婦人たちの手へ先きに渡されるといふのである。

いろ〳〵な享樂的情報

ソ聯では、少くとも黨に關係のある者は、結婚をしないことになつてゐた。また、それを自分の名譽であるとも考へてゐた。だが、これは、何んといつても不自然であるから、しば〳〵男女間にいかがはしい噂が立つたものだ。ヒドイ男になると、同じ家の三人の女姉妹に情を通じて、とうとう法廷へ突き出された樣な珍種もある。

もつとも、正式に『結婚登錄所』へ屆け出た者でも、その屆け書をタツタ一日で反古にする。また、御苦勞さまにも、自分から進んで離婚屆を出しながら、たちまち三日目に取り消すといつた慌て者もある。そして間誤々々してゐる間に姙娠し、つい墮胎といふやうな恐しい犯罪をおかす場合も決して稀れではない。

兎に角、ソ聯では、かうした色々な享樂的情報が傳はつてゐる。だゞし、それがどの程度にまで國民の良心を醉はせてゐるかは明らかでない。だが、もし、十人の內三人までも毒されてゐるとしたらどうか？　その時こそ、革命のステップが亂れてゐると言はれても仕方がないだらう。

女の肩をもつ結婚法

自由な結婚制度

ソ聯では、革命當初に、素晴しく自由な結婚制度を設けた。早い話には、一枚の屆けさへ出せば結婚することも勝手だし、また離婚することも勝手といふ譯。そこで、各國のいはゆる『道學者』の目の玉をすつかり丸くさせたものだ。しかし、簡單に離婚が行はれる場合、子供の處置に窮するやうになりはしまいか？　といふおそれが、多分に起つて來た。といふのは、極く手近かなところで、次ぎのやうなエピソートが殘されてゐる。

ある年の初夏のこと。モスクワでは、市立裁判所長スミルノフの係りでアルセニエフ夫妻が裁かれる事件があつた。無論、事件の主人公は夫のアルセニエフであつて、かれは三人まで細君をとり換へてゐる。最初のワイフは病氣で死んだが、第二回目のはまだ三十そこ〳〵なのに白髮婆さんと

いつて追ン出してしまふ。そして、今のワイフは、先妻の二人の子供が生れた時から低能なのに、何かにつけて苛め抜いた。たとへば、寒い〳〵臺所に寢かすかと思ふと、頭に大火傷をさせ、足に打撲傷を負はせたりした。そこで夫といつしよに法廷へ突き出されたのであつた。

この裁判事件は別に珍しいものでなく、おまけに主被告は帝制時代の將校くづれであつた。しかし、それに似たやうな事實は、今日のソ聯青年の間には一つも見當らないであらうか？　いや、大いにあるとあつて、新しく結婚法を改正する事となつた譯である。

性道德の向上

新しい結婚法はいろんな使命をもつて生れ出たものだが、その主な目的は――性道德の向上といふことにあるらしい。といふのは、例の墮胎がだいぶ問題化されてゐるからであつて、以前はそれを取締る官憲の態度がひじように寛大だつた。何かの病氣で出產に耐へられない婦人は元より、生活に困つてゐる夫婦たちにも、これを行ふことを許してゐた。とろで、中には、自分の單なる肉體的欲望などから、さういふ恐しい罪惡を犯す者もあつたから、急に法律を嚴しくしたのだ。それで思ひ出すのは、サコチェンコの一映畫である。

いふまでもなく、この映畫は同じテーマを取り扱つたものであるが、ちよつと諷刺的に作られてゐるので面白い。荒筋を說明すると、半處女で、スポーツマンである女が、その中心人物になつてゐる。彼女はもう愛のとりこになつてゐて、その戀人から妊娠してゐることを責められるのだ。

「どんな女だつて赤ン坊は生むさ。でも、少しは氣のきいた子供を育てなくちや……」

もつとも、これは彼だけの考へではなく、その同志全體の意見である。そして、陰に陽にコントロールを勸めるのであるが、彼女はどうしても應じない。しかも、うるさくつき纏はれるので、おしまひには家の庭に飛び出して一とくさり母子擁護論を叫ぶ。すると、近所のバルコニーから皆んな顏をつき出し、彼女の演說(？)を熱心に聞く。が、結局は、二人が離婚することになるといふのである。

これは――斷はるまでもなく、『映畫』である。だから、事實あつた事か、無かつたことかは判らない。でも、そんな浮氣な連中はどうも放つて置けないとあつて、新結婚法では、一年若しくは三年の禁錮を申し付ける事にした。

「生めや！　殖やせよ！」

ソ聯では、あのヒツトラーの『生めや、殖やせよ』案を眞似たわけでもあるまいが、姙娠をしきりに鼓吹する事になつた。と同時に、多産の妻女にたいしては、小額でない補助金を與へることにもした。つまり、子供を十一人も有つてゐる者には、最初の年に五、〇〇〇ルーブルを呉れてやる事にしたのである。

一方、姙婦のクビを切つたり、または就職を拒んだりした者には、刑罰をもつてのぞむことにした。といふのは、かういふ職權濫用の手合も珍しくないからで、ツィ先頃にもこんな例がある。何んでも、それは北露のアルハンゲリスクで起つた話で、この町の消防署に、Tといふ女が電信手として雇はれてゐた。ところで、その夫が赤軍に徵られてからは、彼女の位置がとかく危ッかしくなつた。だから、さて工場で働かうとして、その前に醫者の診斷を受けると、健康に異狀なしとのことだつた。でも、工場の支配人はそれを信じないで、かう皮肉に言つたものだ。

「ねえ、君は姙娠してゐやしないかね？」

そして、もう一度、彼女を醫者のところへ遣ると、どうした譯か、姙娠一ケ月半の胎兒が出來てゐるとの診斷だ。そこで、まんまと工場からはねられたので、また元の消防署へ仕事を賴みに行つた。だが、ここでも首を横に振られたから、そのTといふ女は文字通りに一人で街道へ投げ出され

離婚理由のさまざま

モスクワの『結婚登記所』は、人の惡い奴にいはせると、まるでレヂスター見たやうだとある。その譯は、結婚者からも、離婚者からも、何がしの手數料を受け取つて凡てを機械的にどん〳〵登錄してゆく。百人押しかけても、千人押しかけても乃至一萬人押しかけても、ビクともしない——といふ意味らしい。

ところで、登記所へゆく人々の氣持はまち〳〵であつて、特に離婚屆人のそれは變つてゐる。ここでは一々說明することは出來ないが、その離別の理由について、Aといふ女は言ふ。

「まだ子供の時からよく知つてましたので、愛するやうになりましたの。そして家庭をもちましたが、集會には出してくれませんし、夜學へ行つてはいけないと止めるぢやありませんか……」

この女の話などは、すこぶる月並だが、中には奇拔なものもある。

Bといふ男は言ふ。

「僕はさうだとばかり思つてゐたよ——役女はバーヂンだと。とこが、どうだらう。處、處、處女

ではないんだ。だから、離婚することにしたのさ」

これはまだ無邪氣な方だが、次ぎのやうなのになると笑はせる。

Cといふ女の話なのである。

「彼氏は、あたしのお母さんの仲のいゝ友達なのよ。齢は五十六なの。でも結婚したわ。あたしの齢はですつて？　二十よ。でも困つたことが出來たの、あんまり年が違つてゐるので、あたしが欲しがつてゐるんだけど、子供が生れない……」

こんな話題は、まだウンとあるが、もう止さう。たゞ離婚をあんまりイージー・ゴーイングにやらせると、「四十八時間結婚してゐたよ」などと空嘯く手合が飛び出さないでもない。かと思ふと、「一人で、七人も九人も男を有つた」といふやうな狂氣じみた女が見つかるかもしれない。であればこそ、新結婚法では、かう嚴しく規定したのだ。從來の登記料五ルーブルは廢止する、そのかはりに、第一回目の離婚にたいしては――一躍して五〇ルーブル、第二回目には――一五〇ルーブル第三回目には――三〇〇ルーブルといふ風にセリ上げた。その性か、結婚法が改正されてから　約一年間に、レニングラードでは、前年に比べて離婚數が半分に減つたと言はれてゐる。

妻子を捨てる男

數ある新聞の中でも、『イズウエスチヤ』といへば、ソ聯の一流紙である。それだけに、讀者の粒も揃つてゐるかと思つたら、なか〳〵さうではないらしい。早い話が、その編輯子の机の上にはほとんど毎日コンナ投書が舞ひ込むといふではないか。

これは、無慈悲にも妻子をすてた、その男のことを訴へた投書なのである。たとへば、學校を出たこの青年が、病妻と子供を家に殘したまゝ、一年の間一文も送らない。また、さるドクトルは愛する子供のことをすつかり忘れて、旅藝人になつてしまつた。さらに、一人の黨員は、自分の別れた子供に與へる養育料を怠つた。そこで、彼れが働いてゐる工場の人々は、『集團的な父』となつて、この不幸な少年の面倒を見たなど。だから、當局者は、これらの不埒な父親に對して、『アリメント』と稱する扶助料を支拂はせることにした。といつても、これは以前からやつてゐたことで、たゞ違ふのは、その金高が多くなつただけだ。

序でに、この扶助料の料金を紹介すると、子供一人の時は――男の月收の三分の一、二人ならば――その五割、三人以上ならば――六割といつた風に支拂はねばならぬ。萬一、その約束を守らな

い場合には、どうしても二年間の懲役に處せられるといふのである。

ソ聯の新結婚法は古いそれに比較すると、遙かに喧ましいものになつてゐる。もつと明らさまにいふと、ずつと自由がそがれたものになつたと見られぬでもない。しかし、これは、男の側の話であつて、女の方には却つて都合のいゝことが少くないのだ。そこが——新改正結婚法の面白く味へるところでもあらう。

『結婚・離婚部』拜見

ソ聯では、結婚が自由で、離婚も自由だといふことは、もう前にも紹介した通りである。だが、さういふ風は、一體、どんな役所でも受けつけるものか？　また、この役所へ出かける連中は、どんな妙な顏付をしてゐるものか？　——なんて事を知つてゐる者は、あまり餘計あるまい。ところで、それをケンキュウして見ると、なか〳〵味があつて面白いのである。

モスクワの結婚登記所

先づ、モスクワつ子によつて、『結婚及び離婚部』と呼ばれる、その役所を覗いて見る事としよう。と言つても、これは、さういふ特別な建物があるのではなく、地方ソヴエート委員會の中かなにかに居候をしてゐるものらしい。毎朝早くから、ここには、いはゆる花聟花嫁御が、二タ組、三組みといつた風に押しかける。中には、兩親だの、友人だのが、シンメヨウにお伴をしてゆく手合も見受ける。お國がお國だけに、どれもこれも、皆んなきたない普段着か、勞働服なのだ。だが、近頃は、生計もいくらか樂になつたものか、例の長いヴエールに、純白の婚禮服を纏つてゐる者もある。それどころか、兩手に美しい花束を捧げてゐる花嫁御も居ない事はない。でも、さすがに氣まりが惡いと見えて、

「今どき、こんな衣裳なんか付けなくつてもいゝのですけれど」

と、小ツちやい聲で囁く者もある。

登記所内の悲喜劇

『結婚及び離婚部』に押しよせる花聟花嫁は、年齢により、職業によつて、その姿がマチ〳〵である。たとへば、こゝに、一人のすらりつとした背の高い勞働者がゐるとする。かれは、小禮服を着

てゐるのだが、兩肩が變にいかついので、ブカ〳〵だ。その傍には、若くて、二つの頬を薔薇色にした花嫁が佇んでゐる。御兩人とも、いかにも逞しさうな健康さ！　ところで、この花嫁は、周圍の人々からあまり眺め廻されるので、すつかり面喰つて泣き出しさう。だから、可哀さうになつてから花聟が諧解したのだつた。

「ビク〳〵者なんでさァ。何しろ、始めての事なんで……」

彼等と並んでゐるのは、商人出の、お芽出たい一と組である。花嫁御は、雪のやうに白い婚禮服をきて、その上から暖かさうな毛皮外套を羽織つてゐる。花聟は――新しい訪問服。そこへ、やはり小禮服を着て、赤いネクタイを結んだ男がやつて來たが、それは介添人だ。公衆の前に見榮を切るつもりか、わざと外套のボタンをはづしてゐる。

自分の順番がくるまで、花聟はシガーをぽか〳〵吹かしながら、誰彼となく話しかけてゐる。

「あなたは、こゝの屆をすますと、教會へ行くのですか？」

すると、勞働者の花聟は、奇妙なことを聞かれたものだといつたポーズで答へる。

「どうしてさ？……坊さんなんかの厄介にならずとも、シッカリやつて行けますさ。お互に愛してゐさへすれば」

この役所の仕事はなか〳〵能率的である。『ソヴェート坊さん』――つまり、お役人は、「あなたの屆はこれですか？」と聞くが早いか、「今直きやつて上げますよ」と言ふ。そして、急がしさうにノートに何か書き込むと、ポンと判をついて、から尋ねるのだ。

「無論、血族結婚では無いでせうね……宜しい。サインをして下さい」

もつとも、時には、少しく不似合ひな花聟花嫁御が、この『結婚及離婚部』のテーブルの前に現はれる事もある。すると、お役人の顏は、自然と曇つてくるのだ。誰の目にも、女の方が未だ初々しいのに、男の方が馬鹿に年をとつてゐるやうな場合に。と、きつと、から訊かれずにはゐない。

「無理な結婚では無いでせうね？」

女は聞えるか聞えないやうな聲で答へる。

「はい」

「强ひられはしませんか？」

「いゝえ」

そこで、お役人は、半信半疑のうちにも、その不似合な夫婦の結婚屆を受け付けるといふ譯である。

離婚したがる女

『結婚及び離婚部』は、モスクワばかりでなく、レニングラードにも、ハリコフにも、またチフリスにも設けられてゐる。いや、以前には、ハルビンのやうな、ソヴエート領でない『國際都市』にも、フタを開けてゐたものだ。たゞし、總領事館内の別館で、永い未來を喫る幸福人の御入來を今か〳〵と待つたのである。

ところで、そこへ現れた人間が、もし離婚しようといふ連中だとすると、氣分がまるつきり違ふ。假りに、若い花嫁であつても、どこかに憂鬱の色をたゝへ、伏目で床などを眺めてゐる。亭主の方は、流石にそれを顏色に出さずに、他人を見かけると、自分の離婚理由をたう〳〵と辯じ立てる。

「二年前、ウラジホで結婚したのですが、どうもソリが合はないのです。だから、いつそ別れようと思ひましてね」

そして、この不幸な夫婦者は、何か屆用紙の中に書き込み、サインを悄然として東と西に歸つてゆく。

次ぎに、『結婚及び離婚部』の受付に現れたのは、一人の若い娘さんだ。イヤ、實は——花嫁御なんである。彼女も、離婚したがつてゐるのだが、それにはいろ〳〵複雜した事情があるらしい。たとへば、御亭が放蕩者だとか、大酒呑みだとか、もしくは、女房がひどいヒスだとかと言つた具合に。その爲めであるのか、彼女の母は氣がくるつて、もう手のつけようがない。素より、自分の娘の別れ話なんか相談出來ないので、思案にあまつた父親が、この花嫁御を役所へ差し向けたのである。「どうしたら一人者になれますか?」と。だが、そこのお役人には、こんな風の質問は苦手だつた。たゞ、双方の間にうまく話がまとまつた場合にだけ、——結婚でも、また、離婚でも——その屆を受理することになつてゐるから。結局、さういふ七難かしい問題は、國内の事ではないので、外務省の力を借りて、モスクワの國民裁判所に訴へ出るより仕方がないのである。

最後に、もう一つの愁嘆場を紹介すると、これも、一人の若々しくて、しかも美しい女性なのだ。彼女は、未だホンの子供見たいな時に、テエツク・スロワツク人と結婚した。ヨットすると それは——例の日本の出兵當時の事かも知れない。といふのは、いろんな國の兵隊さんがシベリヤへやつて來てゐて、さかんにロシヤの娘を揶揄つたものだつた。中でも、あの膝小僧を出して、細いステツキを振りまわしたアメリカの兵隊にはおもちやにされた。そして、赤ン坊まで生んだ者が

ドッサリあつたことを、今でもよく覺えてゐる。話がツイ脱線したが、彼女も、そんなゴタ〳〵騒ぎの時に、そのチェツク・スロカツク人と親しくなつたのではあるまいか。ところで、二人がいよ〳〵共同生活を始めた時に、この花嫁御は國籍を失つてしまつてゐる。だから、いくら離婚しようとしても、復籍するまでは、どうにもならないとは、さすがに『國際都市』の變つた一風景ではある。

サービスには女の部屋を

ソ聯では、離籍といふ段取りになると、きまつて女の方が居け出るものださうな。だが、時折りは、男とノコ〳〵出かけてゆく。といふのは、かういふ正直だが、野呂間だか、ちつともケジメのわからない人間がゐるからである。

こゝに――さる一人の青年がある。或る日の早朝、かれは、モスクワの『結婚及び離婚部』へ慌てゝ訪ねて行つた。用件といふのは、やつぱり別れ話なのだ。そして、お役人との間に、次ぎのやうな頗る珍問答が交換されたと思ひたまへ。

「離婚させて下さい！……」

「いや、貴方は、きのふ入籍したばかりぢやあないか？　短期間の結婚は、重罪に處せられますゾ！」

「構ひません。どうか、屆だけ出させて下さい」

無理もないのは、かれは今、モスクワの市内に住んでゐる、Gといふ年増女に夢中なのである。だから、貰つたばかりの妻君に愛憎をつかして、斯くは出頭に及んだものだ。それには、この女が自分の部屋の一部を與へるといふ、いゝサーヴィスもついてゐた。つひ、書き忘れたが、その若い色男は技師だつた。

とにかく二人は「結婚」したのである。そして、幸福なるべき新郎の君は、お勤めがすむと毛布にトランクをぶら下げて、先に言つた年増女のところへ出かけて行つた。でも、その部屋の中には今までどほり、たつた一つの寢臺しか置いてない。そこで、かれは大いに喜ぶと思つたら間違ひで、あべにべにフンガイしたものである。

「どこに僕の寢臺があるンです？」

「ソレよ」

「冗談言つちやあいけない。コレは、君のぢやないか？」

「あたしのも、あなたのも……皆んな一つの同じ寢臺よ！」

こんな口喧嘩をした後に、青年はいきなり戸外へ飛び出し、再び『結婚及び離婚部』を訪ねた。性慾りもなしに、又候、離婚屆を出すために。だが、もう退廳時間はとつくに過ぎて夜だつたので、一と晩、門の傍に立往生をしたと言ふのである。

「愛兒を毒する者」

この話はヂと眉唾ものらしいが、『結婚及び離婚部』では、いろんな屆をほとんど機械的にどん〳〵受付ける。まるでレヂスターのやうに。そして、入籍の場合には、何がしの寄附をさせると同時に、左の結婚證明書(?) なるものをきつと買はせる。それには、新郎新婦の寫眞が貼りつけられ、裏面にはかういふ鬼爪らしい文句が書いてあるとか。

「無思慮の結婚と離婚は、たゞに夫婦のみならず、その愛兒をも毒するものなり」

女大臣コロンタイ

『女の中の女』

世間には『男の中の男』といふ者がある。それに比べると、『女の中の女』と言ふやうな者は甚だ少い。大抵の女は、男からおもちやのやうに取扱はれても溫和しくしてゐる。ところで、そんな事ではいけない、彼等をもつと自由にしてやらねはならないとあつて、さうした社會運動に乘り出したのが――アレクサンドラ・コロンタイ女史である。

コロンタイ女史は、或る大地主の家に生れた。だから、生活的には何んの不自由もなかつたが、ただ、一家の寵兒となることに甘んじてゐられなかつた。その理由がどんなものであつたかは知らないが、自分の著述の中にこんな事を書いてゐる。女は「平凡な結婚のベツト」にばかりは蹲つてゐられない。と、それから、海外に出ると、外國の某教授について經濟學を學んだ。歸國すると、もう政治運動に加はつ

たために國外へ放逐された。しかし、ロシヤに革命が起ると、例の『密閉列車』にコツソリ乘り込んで、再び歸國した。そして、一九一七年十一月の大政變を迎へると、彼女の名はいよ〳〵高まつたのである。

大臣待遇を受ける

兎に角にも、ソヴエート革命が成功すると、コロンタイは人民救濟委員會長に任命された。この委員會長といふ地位は、とりも直さず大臣待遇を意味する。そして、女史は、或る集會の席上でかう叫んだ。

「ネフスキー街（レニングラドの銀座）にあるものが欲しければ、何んでも勝手に沒收なさい！」

これは、餘りにも非常識な言葉であるから、聽衆の大部分を驚かした。だが、女史の考へでは、そんな亂暴なことをしても、多くの廢兵や、負傷者を救ひ、さては産婦をいたはれと努めたのだ。

革命後二三年もすると、ソ聯政府の幹部の間に葛藤がはじまつた。コロンタイは、レーニンの政策を喜ばなかつたので、飄然としてノールウエーに去つた。だが、慢然と國外へ出たのではなく、そこのソ聯公使館に「椅子」を見付けたのである。ところで、公使が賜暇をとると、いつか彼の後釜に坐り、勞農大使となつたのは彼女であつた。それから、メキシコに轉任したこともあるが、再びノールウエーに戻つて今日に及んでゐる。

女史から受けた印象

最後に、附言しておきたいのは、先年ソ聯を旅行した時、筆者は偶然にもコロンタイ女史に面會する機會を得たことである。それは、クレムリンの近くを流れるモスクワ河畔の、ある立派な建物の中に於いてであつた。そこには、各國の外交使節も少からず集まつてゐた。そして、これらの人々の間で、思ひも設けぬ女史の姿を見出したのであつた。女史は、六十に近い人とはどうしても想像出來ぬ位に若々しかつた。五分と一つところには居ず、あつちこつちと歩き廻つて、いろんな人と話してゐた。序でにいふが、同女史は、十三ヶ國語に通じてゐるさうだ。その時、私はかう思つた。この人にして、始めて、あの『赤い戀』や、『グレート・ラヴ』のやうな小說が書けるのだ、と。

とにかく、コロンタイ女史は、『女の中の女』といふことが出來よう。女史は男と相伍して、自分の信ずる道を歩いた。無論實踐もした。かうした特異な女性が、單にソ聯ばかりでなく、國外に

認められても、誰も否定する者はあるまい。

『ソヴエート型』の女

ソヴエートの女と言へば、アメリカや、フランスの婦人などと比べて、何んとはなしに或る變つた味を有つてゐる。スマートと言ひたいところだが、さういふ色彩は少くて、どこか土臭く、野暮な感じさへする。それだけに、また、どこかに底力があるやうにも思はれる。だから、時には、男も顔負けするやうな、ずゐぶん思ひ切つたこともやる。今、それらの婦人風景を、プリズムを通して色々な角度から眺めて見よう。

地上の女

このソ聯では、男のやうに、女も大いに負けぬ氣を出して、とにかく毎日働いてゐるらしい。男のゐるところには、きつと女もゐると言つた風に。早い話が、上は大臣から——下は勞働者まで、皆んな女が仕事に就いてゐる。さう言へば、誰でも、あの『世界最初の女大臣』コロンタイを思ひ

出すであらうが、彼女には偶然逢つたことがあるから、別項に少し詳しく書いておいた。

だが、嚴密にいふと、彼女が救濟委員會議長（大臣待遇）になる以前にも、それに似たやうな女がロシヤにはゐたのだ。ケレンスキー時代の社會大臣バーニナ女史が夫れである。只だちがふのはその肩書だけで、二人の仕事は殆んど同じだつた。簡單にいふと、我が國で先頃設けられた、國民の保健事業に努力する厚生省の仕事に、傷病院(?)の仕事をも兼ねたやうな事務を取つてゐたのである。何故なら、革命の當初には、ソ聯の大部分が塗炭の苦しみにあへぎ、國内戰の犠牲になつて手足を失つたやうな廢兵をも多く見受けたから。ところで、コロンタイ女史が、勞農使節としてノールウエーに去つたあとのソ聯にも、いはゆる『女大臣』は生れてゐる。財政人民委員會議長ヤコウレワがさうで、彼女はソ聯の大藏大臣よろしく活躍したが、就任後間もなく姿を消してしまつた。

だから、現在は、女大臣と稱する者はゐない譯であるが、昨年末から設置された最高會議には、それにあまり劣らぬ女代表が地方の一共和國から選出されてゐる。他方においては、一日一人の女が中央委員會に議席を有つてゐるといふから、とにかく大したものである。

×

こんな風に、ソ聯においては、女大臣にもまた駐外大使にも女がなれるのであるが、その大部分のものは、普通の勞働者として立ち働いてゐる。しかし、この勞働者の中でも、『スタハノフツイ』と呼ばれる、殆んど超人的な能率主義者の間には、マカロフ女史のやうな高給取りもゐる。彼女は嘗て一日に七、八ルーブルの安賃銀しか貰つてゐなかつたが、やがて百七十ルーブルの高給を與へられ、最後には、それが大枚一千三百五十ルーブルまで鰻上りをしたさうだ。と言つても、こんな嘘のやうな昇給が懐ろ手のまゝで實現するものではない。それには、きつと人一倍のエネルギーが消耗されてゐることは確かな事實で、今まで十一割から、十二割までの仕事しかしてゐなかつたのに、急に五十割までの仕事――つまり、人間で言へば、實に五人前の成績を擧げるやうになつたのであつた。つひ書き忘れたが、彼女は時計工場で働いてゐたのである。

×

ソ聯では、勞働者の次ぎに農民が幅を利かせてゐるが、一體に、この連中は文化水準が低い。そこで、トラクターの運轉などになると、まるッきり知識がないので、少しく熱心な者は講習會へはいる。アングリーナといふ女もさうで、彼女がその手續きをすると、意外にも、みんな寄つてたかつて調戯つたものだ。

「止せよ！　女がトラクターなんか操縦出來るものかい？」

アングリーナは、講習會を終へると、自分のコルホーズ（集團農場）へ歸つた。そして、能力百パーセントと言つた風な『突擊隊』なるものを組織したが、中々うまく行かない。春の野良仕事は一向に進まないし、費用ばかり嵩んでゆく。すると、また罵倒が始まつたものだ。「止せよ！　女がトラクターなんか……」と。

彼女はそれでもまだ元氣を失はない。あべこべに『突擊隊』の者を勵まして、トラクターの修練をさせたり、工藝學校へ通はせたりした。そのお蔭で、急に操縦がうまくなつて、全ドネツ地方のトラクター競走があつた時には、見事に一等賞を貰つた――とは、先づ〳〵目出たし。

地下の女

あの一時許判だつた地下鐵工事を完成するためには、ちよつと八千人からソヴエート婦人が動員されたものであつた。かれらは、毎日、ツバ廣の防水帽子、青い制服を着、ゴム長靴をはいてトンネルの中へもぐつたりした。だから、顏には泥水がはね返へされ、手はセメントだらけになつたので、有閑マダムなら、きつと怖毛をふるつて逃げ出したであらう。でも、これらの婦人たちは、さ

うした難工事をやつてのけたので、二十一人の者が最高勳章を貰つて、自分の胸に光らせるやうになつたとか。と言ふと、いかにも骨ツぷしが強さうだが、たゞの勞働婦人ではなささうだ。とにかく文學もいくらか知つてゐるし、音樂も判らない方ではなし、ダンスも好きなのは――彼女達だ。そこで、一部の者が芝居を見に行つた時に、こんな議論の花を咲かせたことがある。なんでも、その劇場では、『エフゲーニー・バザーロフ』を演つてゐたのだが、その女主人公であるカーチャの運命がいかにもツルゲーネフ式だとあつて、お互に爭ひ出した。つまり、一人の女性が

「あんな娘は現代に生きてやしない」

と言ふと、他の者も

「さうよ、さうよ」

と調子を合はせて、ツリゲーネフ派の女性が、とう〳〵凹まされてしまつたといふ話。

×

かう書いてくると、ソヴエートの女は、誰も彼も男性的な活動ばかりしてゐるやうに見える。となると、戀愛などはクレムリンの高塔をかすめる夕靄ぐらゐにしか考へないやうに。だが、中には少からず異性にチヤームされてゐるやうな男女もゐないことはない。

モスクワは、スーシチエフスカヤ街の十五番地に、或るアパートがある。その第九號室に、まる語學院の三年生であるGといふ女學生が住んでゐた。彼女は、夜の十二時頃に歸つてくると、いきなりドアを開けようとしたが、どうしても巧く開かない。そこで一度、二度、三度と鍵を廻はしたが、やつぱり駄目なので、しばらく家のまはりを散歩することにした。そして歸つてくると、また鍵をまはして見たが、どうしても思ふやうに行かない。でも、不思議なことに、部屋の中では誰かの足音が聞えるやうな氣がする。と言つても、それは決して泥棒ではなく、實は同宿のDといふ青年の足音なのだ。つまり、GとDとは、一つの衝立を距てゝ一室に泊り込んでゐるのだが、最近Dが若い細君を貰つたので、かくは彼女に締め出しを喰はしたのである。

兎に角、その晩のことが喧嘩の種となつて、GとDとはだん〳〵仲違ひをするやうになつた。だから、Dは家主と手を握つて、Gをなんとかして逐ひ出さうとして、こんなことを言つた。

「あいつは淫賣だ。始中終、變な男が出入りしてゐるよ」

ところで、Gの方は、こんな事を聞くと、もう暫くの間も默つてはゐられない。そして抗辯すると、おしまひには、Dが腕力を振ふやうになり、彼女を部屋から摑み出した。と同時に、その外套やら、オーバシュウスやら、本までをドン〳〵階段の上に投げ出したものだ。しかも、まだ應じな

いと、最後には裁判にまでかけて、とう〳〵勝つたのである。だが、これは――いかにも不當であるとあつて、『モスクワタ刊が大いに世間の注意を喚起したことを忘れない。

空の女

ソ聯では、人間よりも機械の方が重寶がられる――と、誰かがふざけて言つたことがある。よもや、そんなことはあるまいが、兎に角パラシュートに對する凝り方も相當なものだ。若し嘘だと思つたら、モスクワの『雀ケ丘』にある、ゴーリキー記念公園にでも行つて見るがいゝ。そこの一部には、うんと高いパラシュート塔が建てられ、何時でも取り外しの出來るパラシュートが、T型の支柱の上に掛けてある。これは、モスクワばかりでなく、地方の公園とか、農園とか、または飛行クラブを覗いて見ても皆同じであらう。中でも、旗日などには、若い男女がその塔の上にゾロ〳〵登り、自分の順番を待つて盛んにジャンプしてゐる。といふのは、かれらが面白おかしく遊んでゐる内に、パラシュートとはどんなものか、その技術習得の興味はどうかと言つたやうなことを、大衆の間に吹き込まうとしてゐるのだ。そして、今日の首都には、もはや數百人のパラシューターとその卵が産み落されてゐるとか。

パラシューターの卵と言へば、ウオローヂヤなんかは、イの一番に思ひ出されていゝ典型的な志願者であらう。だが、まだ十二、そこ〳〵の鼻ッたらし小僧で、當り前なら、おッ母さんに飛行機模型の材料でもおねだりする年齢である。ところが、その家の傍には、「大人」のパラシューターがどつさり居るせいか、中々どうして隅に置けない。先頃、かれは、兩親の目を掠めてソーツと一枚の毛布を盗み出し、曲りなりにも、これをパラシュートに仕立て上げた。どうするのかと見ると、ボロヂノ橋まで出掛けてゆき、大膽にも橋の手摺りからフワ〳〵とやり出した。そして、三十五メートルとかを飛び降りて無事に着陸したとかいふ話。

と聞いた『大人』のパラシューター連、早速、かれの勞をねぎらつて

「……いゝかい？　もう五、六年待つのだぞ。すれば、きつとパラシュート學校へ上げてやるから……」

と大いになだめたさうだ。そこで、ウオローヂヤはペツを掻きながらも大人しくなつたといふ。が、ヒョツとしたら、かれはアデリベルグといふ女の身上が羨ましくて仕方がなかつたのかも知れない。女と言つても、やつと十六になつたばかりだが、それでも立派な免狀を有つ、ソ聯切つての若いパラシューターだからである。

しかし、どんなに優れたパラシューターであつても、生涯パラシュートだけをいじくつて送る者はまづ少いのであつて、かれらの終局的目的は立派な飛行士になることだと思ふ。ポリーナ・オシペンコといふ女島人は、この意味における成功者で、水上機の操縦がうまい。彼女は、最初、少しも重荷を積まずに八・八六四メートルの高空まで昇つた。ところが、三日の後には、五百グラムの重荷を載せ、また一千グルムの重荷を載せても飛んで、最高記録を取つたといふことだ。昨年の初夏のことである。

北極の女

ソヴエートの女は、内地ばかりでなく、遠く北極地方にまで出かけてゐる。それも一人や二人ではないらしい。ある女は醫者として、もう數年も極地に留まつてゐる。他のある女は、自分の夫君と共に、その土地に住むエスキモー人や、チユクチ人にABCを教へてゐる。ただシユラーデルと言つただけでは判るまいが、かの有名な探險船――『チエリユースキン』が遭難した時、その乘組員を救ふべく役立つた一人は彼女であつた。數週間といふものを、冷たい氷山に閉まれながら、探險隊本部のラヂオ局に頑張つて、モスクワにSOSを飛ばしたものである。

月刊雜誌

喫茶街を中心とした
スマートな流行雜誌
喫茶街
菊判總アートの豪華版
定價三十錢

〔特約〕 東京鐵道局公認（鐵道保養會・鐵道弘濟會）啓德社

發行所 亞細亞出版社 振替東京七一五二七番

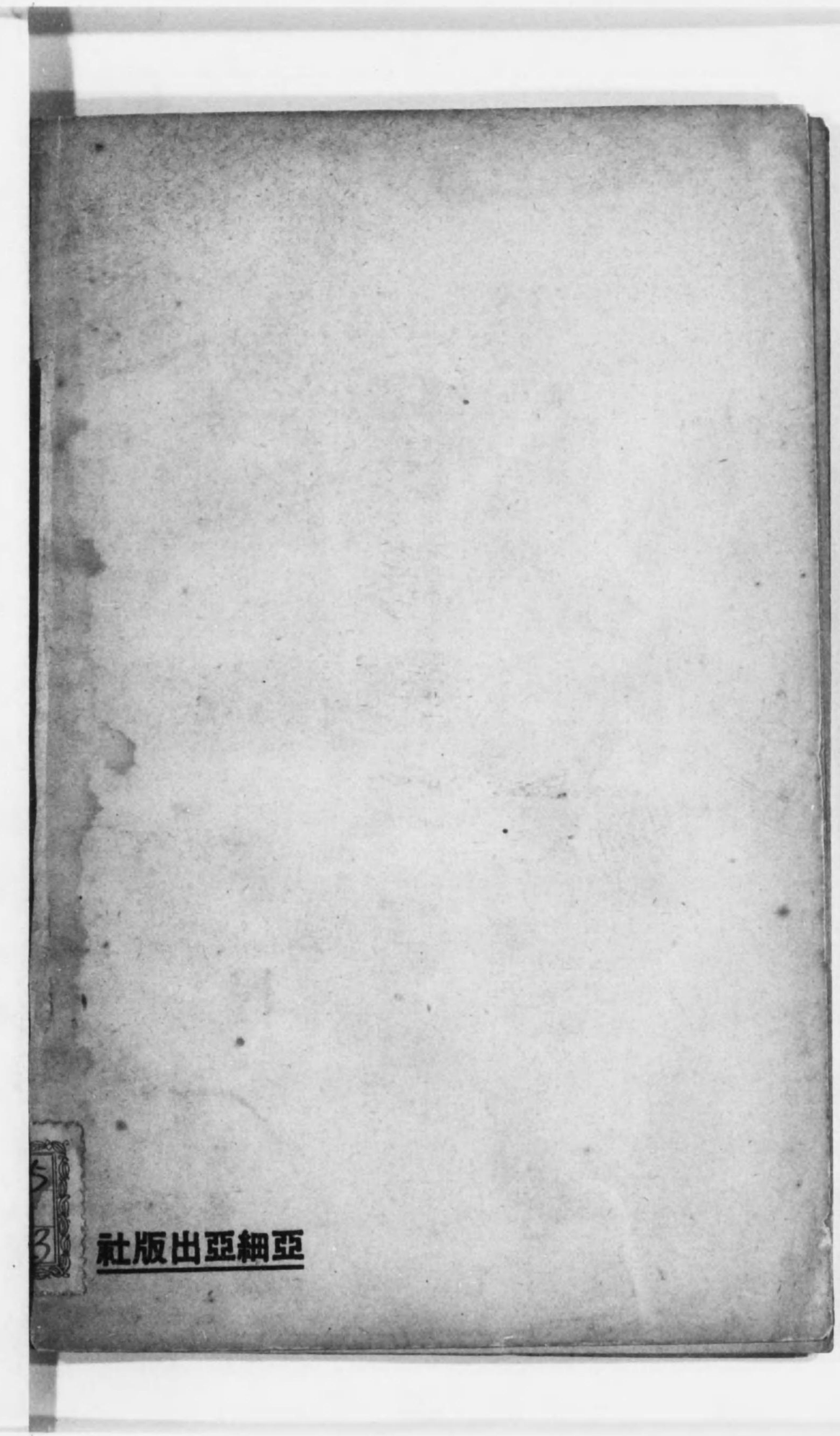
謎のソ聯赤い女の內幕 No. 18
昭和十三年五月廿五日印刷
昭和十三年五月廿八日發行
定價十錢

著述者 G・P・U
編纂兼發行者 東京市下谷區根岸町八九番地 設樂邦太郎
印刷所 東京市小石川區指ケ谷町一四六 大森印刷所
發行所 東京市下谷區車坂町八九番地 亞細亞出版社 電話下谷(83)四七六七番 振替東京七一、五二七番
配給所 月刊『喫茶街』 大阪市北區堂島上二ノ二五 京阪神特約店 新正堂書店

全國各驛賣店・ホーム・街頭新聞スタンド・有名書店にあり

◎亞細亞出版社版既刊書目

◎送料各冊金三錢

大野慎著	戰時議會と政局の動向	定價金二十錢	
尾瀨敬止著	各國女兵士の出現	定價金十錢	
鈴木治郎著	ソ聯の國境を衝く	〃	
島山景三著	死の神秘相	〃	
尾瀨敬止著	樺太國境の實狀	〃	
大野慎著	革新日本精神の根源を語る	〃	
内閣情報部囑託 小松孝彰著	現地	〃	
豐島信一郎著	赤色ロシヤの國民生活	〃	
宮川春夫著	商賣の裏表	〃	
豐島信一郎著	ゲ・ペ・ウの正體を暴く	〃	
大野慎著	世界改造の發火點	〃	
深町すみ子著	男讀むべからず	〃	
京山石田一郎著	皇軍慰問の旅 わらわし隊報告記	〃	
丸松著	指相と運命	〃	
松原宏整著			

終